

ほのあかりの岬で 夜の呼吸に出会う

第二編 「岬の朝を歩く少女が二人」

第一編のあらすじ：都会で乾いた心を抱える主人公山岡千紗が、大瀬崎の夜明けと真木久美子の案内で忘れていた呼吸を取り戻していく。海に寄り添う静けさが胸の奥の小さな痛みをそっと溶かし、千紗の中に眠る物語が静かに動き始め、心地よい眠りへ。

序章

夜の呼吸が明けていく

山岡千紗は、ゆっくりと目を開けた。大瀬崎の朝は都会のそれとはまるで別の生き物だ。

光は静かに降り、澄んだ空気が胸の奥の固い結び目を少しずつほどいていく。

さっきまで夢を見ていた。

波打ち際で、小さな少女と手をつないで歩いていた。二人は水辺をくったくなく笑いながら、小走りに追いかけてくる。少女は千紗の名を呼び、千紗も自然に手を握り返していた。とその瞬間、ふいに光が揺れ、少女は消えてしまう。その瞬間、千紗は叫んでいた。

「みはる！」

そこで目が覚めた。温かさと切なさが、まだ胸の奥にじんわりと残っている。届きそうで届かなかったその距離だけが、なぜか鮮明に記憶に残っていた。

第1章 岬の朝を歩く

廊下に出ると、真木久美子さんが柔らかく手を振った。「おはようございます、千紗さん。よかったら岬を散歩しませんか？」

千紗は迷わず頷いた。久美子の声は、海風のように自然に心へ入ってくる。

二人はゆっくりと岬へ向かった。潮の匂い、森の肌触り、波のリズム音・・・千紗の中の無邪気が呼び覚まされていく。

「ここに来ると、呼吸が深くなるんです。」
久美子の囁きに、千紗も胸いっぱい朝の空気を吸い込んだ。そのとき、夢の中の少女の笑顔がふわりと胸の奥で揺れた。

第2章 手仕事の朝食

岬を一周してイカダテラスに戻ると、『駿河湾
まんなか食堂』から香ばしい匂いが漂ってき
た。「ちょうど朝食の時間ですね。そのまま
どうぞ。」真木さんに促され扉を開けると、黒
板に大きく書かれていた。〈今日の朝食：トロ
サバステーキ〉『えっ？サバで、ステーキ？』
千紗は一瞬、足を止めた。そこへ梶原シェフ
が声をかけてきた。「おはようございます。気
になりますよね。これ焼いているだけじゃない
んです。」

「え？ただの焼きじゃない？」

「**手の感覚**です。いい塩梅（あんばい）。焼く
前の水分と塩分の具合を調整するんです。サバ
は日によって状態が違うので・・・」

千紗が竹箸の先端を置くと、身はしっとり
ふっくらとしている。

「**手仕事**ですね。」思わず口にした。

梶原シェフは照れたように笑った。

「今じゃ、**手間**かけちゃってんのって言われ
ちゃうんです。でも、手でやらないと絶対に出
ない味があるんですよ。」

「**手間**・・・」

千紗の胸の奥できらりと光った。

第3章 フライヤーの縁

朝食を終えロビーに戻った瞬間だった。テーブ
ルの上の一枚が、千紗の視界を射抜いた。

〈三条 美晴 展〉

京都・同時代ギャラリー（1928ビル）

『みはる？』

今朝の夢で呼んだばかりの名だ。

心臓が大きく跳ねる。

「久美子さん、このフライヤー？」

久美子は少し間を置き、静かに頷いた。

「実は、ここの施設の再生の話は、京都1928
ビルの関係者の方からの相談が発端なんです。
そのご縁で交流が続いています。」

久美子は続けた。

「来年は同時代ギャラリーさんで、

『伊豆ひとつ海 手仕事で灯す深海の記憶』

という企画やりたいねって、スタッフの間で
話してるんです」

胸の奥で何かがパンと弾けた気がした。夢の少女の名前が、こんなかたちで現れるなんて。

千紗はフライヤーを握りしめた。

「・・・行かなきゃ。」叫んだ。

「京都へ、ですか？」久美子が驚いた表情。

千紗は静かに頷いた。

「はい。『みはる』という女の子なんです。
今朝の夢に現れた意味を確かめなきゃ！」
そして、千紗は大瀬崎を後にした。

第4章 1928ビルの夕暮れ

京都に着くと、千紗は夕暮れの1928ビルの前
に立った。陽を帯びて外壁は薄金色に、緑の
窓枠は静かな影となって輪郭を描く。

古いのに、どこかシュッとすがすがしい空気
感だ。重厚なのに、やさしい温度感がある。

『これって、**人の手**でつくられてるよ！』

千紗はそんな感覚を覚えた。

階段を上り同時代ギャラリーの真鍮のドアノブ
を押した。目に飛び込んできたのは海の漂流物
でつくったランプシェードの灯り。さらに、
流木やガラス片のオブジェの数々から、白い
壁面には深海の静けさを写した作品。ぐるり
と自分を取り囲んだ。

そしてギャラリーにしては珍しく窓がある。
オレンジの夕陽が斜めに差し込んでいる。
その海の中のような光線の中に、ひとりの女性
性がふわっと浮かんできた。

「三条 美晴さん？」

千紗は息を吞んで声をかけた。
なぜか懐かしさが胸に込み上げてきたのだ。

第5章 手作りの人生が重なるとき

ギャラリーのベンチに並んで言葉を交わした。
美晴は語る。
ロンドンで父と暮らした日々、
セントアイヴスで貝殻を拾った記憶。

バーナード・リーチの工房に触れ、
手仕事の思想に惹かれたこと。

千紗も語る。

母と旅して集めた陶器たち。

なぜか益子焼に心を奪われ続けてきたこと。

ふたつの人生の欠片が、ひとつ、またひとつと
重なっていく。それは、間違いなく、知って
いる人に再会した感覚だった。

「不思議ですね・・・初めて会った気がしな
いんです。」美晴の囁きに、千紗は胸の奥が熱
くなるのを感じながら、

「私も同じです・・・」

そのとき背後から声がした。

「ようこそ、1928ビルへ。」

同時代ギャラリーとアンデパンダンの主宰者、高さん。この建物のゆらぎを、長年守り続けてきた人物だ。

「お二人の『手仕事の物語』が聞こえてきて・・・どうしてもお伝えしたくなりました。」高さんは穏やかに微笑み、続けた。

「大山崎美術館をご存じですか？あそこにはリーチさんの作品があります。そして・・・建物の生い立ちが、この1928ビルと驚くほど似ているんです。お二人に感じてほしい。手づくりの建物と作品を。」

二人は自然と顔を見合わせた。

「行こう、千紗さん。」

「うん。一緒に。」

美晴は、ギャラリースタッフへ展示の寄り添いをお願いした。高さんは深く頷いた。

「旅の打ち合わせは、地下1階のアンデパンダンでどうですか？お二人の『再会』のお祝いさせてください。ちょうど熟成がいい塩梅の自家製生ハムがあります。和歌山産の幻のアボカドを使ったポテトサラダもできてます。知る人知るアンデパンダンの秘伝のレシピでつくってます。合わせるならシェリー酒です。一杯目は、アモンティリャードのロス・アルコス。ブエナ・ノーチェ！（=いい夜を！）」

千紗と美晴の笑顔のペアになり、
1928ビルの階段をゆっくり降りていった。

まだ知らない大切な記憶が、
明日、そっと目を覚まそうとしている。

（続く）

— 登場人物紹介 —

◎ 山岡 千紗（物語の主人公）

物語の主人公、山岡千紗。東京で企画職として走り続けてきた女性。仕事は誠実に向き合い、周囲からの信頼も厚い。けれどここ数年、気づかないうちに心の奥の乾きが広がっていた。忙しさに紛れて後回しにしてきた気持ち、本当は立ち止まって向き合いたかった感情。その小さな違和感は、誰にも言えず胸の奥で積もっていた。そんな折、SNSで偶然見かけた大瀬崎の海と富士山が一体になる一枚の写真に心を掴まれる。

「忘れていた呼吸を取り戻せる」 そんなひと筋の直感

に導かれるように千紗は大瀬崎にやってきた。そこで触れる自然、人との出会い、静かな夜の時間・・・彼女の内側に眠っていた深い呼吸がそっと呼び覚まされていくようだった。

（続く）

続編予告

第三編「おとくにの丘で、記憶が目覚めます」

大瀬崎の駿河湾と、大山崎の桂川が、ひと筋の見えない線で結ばれる。手仕事、民藝、家族、そして自由。二人の物語は、さらに静かで豊かな森の奥へ進んでいきます。近日公開予定。

◎ 真木 久美子

ネイチャーイン大瀬館のシニアマネージャーであり、海を知り尽くすシニアガイド。自然と人の心の両方を読む不思議な感性をもち、海辺のネイチャーツアーを

手がける。着物が似合う元芸妓のスタッフ、地元主婦のスタッフ、来月合流予定の中央アジアの青年など、多様な仲間を束ねる静かな大黒柱。

◎ 梶原 哲人

「駿河湾まんなか食堂」の料理長。フレンチの名手で湯河原の高級リゾート出身。釣りをきっかけに大瀬崎の海に魅了され住み込みの料理長に就任。地元農家・漁師と深くつながり、土地の記憶を宿す料理を目指している。

（＊）バーナード・リーチについて

バーナード・リーチ（1887-1979）は、日本と英国を往復しながら「手仕事の尊厳」を世界に問いかけた陶芸家です。20世紀に入り大量生産が進む時代にあって、彼は『ゆらぎ』を宿す手作りの美を守り続けました。今回の物語で千紗と美晴が惹かれる「温度のあるもの」「唯一無二のもの」への感覚は、まさにリーチ

の哲学に通じるものがあります。二人が大瀬崎、
1928ビル、大山崎へと歩む旅路は、リーチが探した
本当の自由への道を静かになぞるようでもあります。

2025年12月1日

ネイチャーイン大瀬館 石井 清彦

公式サイト： <https://www.natureinn-osekan.jp>

Instagram： https://www.instagram.com/osekan_natureinn